

## アントニー・ブリンケン新国務長官



国際政治学者 高橋 和夫



### [セサミストリートの国務副長官]

代々の米国の国務長官の中で「セサミストリート」に出演した経験のある人物は、ジョー・バイデン新大統領に国務長官に指名されたトニー・ブリンケンだけだろう。オバマ政権期に国務副長官だったブリンケンは、難民問題の深刻さと重大さを子供たちに訴えるためにセサミストリートに出演し、毛むくじゃらのマペット（人形）のグローバーに難民について教えた。セサミストリートは、もちろん米国の子供のためのテレビ番組である。この出演は、ブリンケンという人物の一面を示すエピソードだろうか。この例に見られるようにブリンケンは、これまでの国務長官にない型破りな面を持っている。多彩で多様な



グローバーとブリンケン

出所：U.S. Department of State at <https://flickr.com/photos/9364837@N06/29713891601>

人物である。その多彩さに関しては、本稿の最後で戻ってきて語りたい。

この新しい国務長官について紹介したい。さらに、ブリンケンのようにビル・クリントンとバラク・オバマ両大統領の時期から政権の中核で活躍していた民主党の主流派と、今回の大統領選挙でバイデンの勝利に貢献したバーニー・サンダース上院議員に代表される進歩派との関係についても言及したい。

### [ドルトンスクール]

ブリンケンは長らくバイデンの外交顧問として知られてきた。それゆえ、ブリンケンの国務長官への指名には驚きはなかった。このブリンケンとは、どのような背景の人物なのだろうか。

ブリンケンは、1962年にニューヨークの裕福なユダヤ系の家庭に生まれている。富裕層の子弟が通う私立のドルトンスクールで幼稚園から学んでいる。この学校は、教育の質と授業料の高さで知られている。数か国語のコースを提供するなど、質ばかりでなく内容も豊富で才能のある子供たちには無限の可能性を開く学校のようなのだ。

### [エリザベス・テイラーの弁護士]

さてブリンケンは、両親が離婚し、母親の新しい夫の住むフランスへと移った。母が再婚した相手はサミュエル・ピサールというポーランド系のユダヤ人で世界的に著名な弁護士であった。ピサールはポーランド東部のビャウイストクという町で生まれた。この町は第二次世界大戦中の1939年にドイツ軍に占領された。父親は抵抗運動に関与したとしてゲシュタポに殺害された。残りの家族は、絶滅収容所に送られた。母と妹は、そこで死亡した。当時13歳だったピサールは、しかしながら、その後4年間を幾つかの収容所を移動させられながら生き延びた。第二次大戦末期には悪名高きアウシュヴィッツの絶滅収容所にいた。東からソ連軍が迫ってくると、ドイツ軍は同収容所のユダヤ人をオーストリアやドイツの方向に徒歩で移動させた。歩けない者は殺害された。歩けた者の多くは新しい収容所で殺害された。ドイツ南部のダッハウの収容所へと歩かされていた際に、米空軍機の爆撃を受けた。ドイツ兵の移動と空から誤認されたのだろう。爆撃の混乱に乗じて、ピサールは逃げ出し森に身を隠していた。その2~3日後に戦車の音が聞こえたので、森から出て見ると星のマークの米軍の戦車がいた。ピサールは戦車に駆け寄った。戦車から米国の黒

---

### 筆者紹介

福岡県北九州市生まれ。  
大阪外国語大学外国語学部ペルシア語科卒  
アメリカ合衆国コロンビア大学国際関係論修士  
クウェート大学客員研究員、放送大学教員などを経  
て2018年より一般社団法人先端技術安全保障研究  
所会長

[主な著書]

『イランとアメリカ』（朝日新聞出版、2013年）

『イスラム国の野望』（幻冬舎、2015年）

『中東から世界が崩れる』（NHK出版、2016年）

『中東の政治』（放送大学教育振興会、2020年）

『最終決戦 トランプ vs 民主党』（ワニブックス、2020年）

[ブログなど]

<http://ameblo.jp/t-kazuo>

<https://twitter.com/kazuotakahashi>

<http://www.giest.or.jp>

[https://note.mu/t\\_kazuo](https://note.mu/t_kazuo)

---

人兵が顔を出すと、知っている唯一の英語「God Bless America!」（神よ米国に祝福を！）と唱えた。米国兵が少年を戦車に迎え入れた。こうしてピサールは第二次世界大戦を奇跡的に生き延びた。同じ学校にいた900名の子供たちでナチスの滅亡を見たのはピサールただ一人だった。2020年12月にバイデンに国務長官に指名されると、その場でブリンケンは、この話を語った。

その後ピサールは、ドイツ、フランス、オーストラリアなどで生活した。そしてパリのソルボンヌ大学で学んでいる。そのせいもあってか、ポーランド系のスホヴォルスキー (Suchowolski) という苗字を捨てピサールに改名した。PISARは、パリを意味するPARISという5文字の並べ替えである。

米国に渡ってハーバード大学で博士号を得ている。そのハーバードで書いた米ソ関係の論文が注目を集めた。注目した一人が同大学出身のジョン・F・ケネディだった。ケネディはピサールを顧問に抜擢した。ケネディが暗殺されると、ピサールはワシントンを去り、ハリウッドに移った。そこで弁護士業を開業し大変な成功を収めた。その顧客にはジェーン・フォンダ、エリザベス・テイラー、リチャード・バートン、カトリーヌ・ドヌーブなどがいた。離婚と結婚を繰り返すスターたちにとっては、慰謝料の決定などに関与する顧問弁護士は「必需品」である。ピサールは高価な必需品だった。その他にコカ・コーラ社や台湾の中華民国政府の顧問弁護士を務めた。さらにはフランスのジスカールデスタン大統領や国際オリンピック委員会のファン・アントニオ・サマランチ会長にも助言していた。またミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」の作曲などで知られる音楽家のレナード・バーンスタインなどとの交遊関係でも知られていた。

この冒険小説の主人公のような義理の父親から、若き日のブリンケンはしきりに絶滅収容所の話聞いたという。物心のつき始めたブリンケンは、同じような年齢で収容所に送り込まれた義父から直に、ユダヤ人のたどった悲惨な体験を記憶に染み込ませながら育った。パリで高校を卒業した後、ブリンケンは米国に戻りハーバード大学で学んだ。そしてコロンビア大学のロースクール（法学大学院）でも学んだ。卒業後は、ニューヨークの有名な法律事務所に勤務した。またジャーナリストとして国際情勢を論評したりもした。さらには映画作りにも手を染めた。

## 【クリントン政権の中枢へ】

そして、国務省に入った。ビル・クリントン大統領の時期である。「政府の仕事というのは、他に何をやってもダメだった人間が最後にたどり着くって言いますよね。私は弁護士、ジャーナリストそして映画のビジネスもやったのですがね、クリントン政権の時に国務省に入りました」というのが本人の弁である。

国務省では、直ぐに国際情勢への幅広い知識が認められ、国家安全保障委員会（NSC）



に移動した。大統領直属の部門である。そこで文才を見出されクリントン大統領の外交問題のスピーチ原稿を起草するようになった。そして次にはNSCのヨーロッパ部門を統括するようになった。

クリントン政権とブリンケン一族は、このブリンケン以外にも深い関係にあった。というのは、ブリンケンの本当の父親の一族は民主党へ多額の献金をしていた。多額の献金の見返りに当選した大統領は、大口の献金者を大使に任命する例が多い。クリントン大統領も例に習いブリンケンの父親のドナルドを駐ハンガリー大使に、叔父のアランを駐ベルギー大使に任命している。二人とも投資銀行家として成功している。ブリンケンの国務省入りには、もちろん本人の幅広い経験や多言語を操る能力が重要であった。そして、こうした血のつながりも、邪魔にはならなかっただろう。

2000年の大統領選挙で共和党のジョージ・W・ブッシュが勝利を取めると、ブリンケンはホワイトハウスを離れ、ジョージタウン大学の戦略国際問題研究所の연구원となった。この研究所はCSISとして知られる。石油会社や兵器産業などからの多額の寄付で運営されている。米国政府の上層部の大半は、大統領による政治任用なので、大統領が民主党から共和党に代われば、民間に出てコンサルタント会社を始めたり、シンクタンクと呼ばれる研究所群に吸い込まれたりして行く。ブリンケンも、そうした一人だった。そして民主党政権の復活を待った。

## [バイデン陣営へ]

2002年、ブリンケンはエヴァン・ライアンと結婚した。ビル・クリントン大統領夫人のヒラリー・クリントンのスタッフとして働いていた女性だった。アイルランド系のカトリック教徒である。この年、ブリンケンの人生にとって重要な出来事が、もう一つあった。それは、もう一人のアイルランド系のカトリック教徒との出会いだった。バイデンとの出会いだった。ブリンケンは、上院の外交委員会のスタッフとして働き始めた。これがバイデンとの長い関係の始まりだった。当時のバイデン上院議員は、同院の外交委員会の委員長だったからだ。

この職務を通じて二人は親しくなった。そして2008年の大統領選挙にバイデンが出馬した。しかしながら、民主党の候補者指名争いでヒラリー・クリントンとバラク・オバマの両上院議員に差を付けられた。早い段階でバイデンは脱落して、オバマ支持に転じた。

そのオバマが、ヒラリーを振り切って民主党の大統領候補指名を獲得すると、バイデンを自らの副大統領候補に指名した。そして2008年11月に共和党のジョン・マケイン候補を破ってオバマが大統領に当選した。望んでいた形ではなかったにしろバイデンは、いわば裏口からホワイトハウスに入った。大統領は副大統領にイラク政策などの面で大きな権限を与えた。その結果、バイデンの外交顧問であったブリンケンが米国のイラク政策に大



ビンラーディン殺害の実況中継に見入るオバマ大統領と側近たち。薄いブルーのシャツで体を傾けている後ろから2番目の人物がブリンケン。

出所：The White House

きな発言力を持つようになった。

そして、やがてブリンケン自身もオバマ大統領と親密な関係を築くようになり、同大統領を囲む少数の外交問題の専門家のチームの一員となった。その証拠に2011年5月のオサマ・ビンラーディン殺害の際のホワイトハウス内部の写真が指摘できる。この殺害作戦はドローンを使ってホワイトハウスに実況中継された。その映像を見るオバマ政権幹部の写真が公開されている。ブリンケンの姿を写真の後方に確認できる。

### 【オバマに「盗まれて」】

そして2013年にオバマ政権が二期目に入ると、ブリンケン是国家安全保障問題の次席補佐官に任命された。首席補佐官のスーザン・ライスに次ぐ地位である。なおバイデンは、やはり2020年12月に、このスーザン・ライスを医療、教育、移民など内政全般を指揮する国内政策会議（DPC）委員長に指名した。

バイデンの言葉を借りると、大統領が副大統領からブリンケンを「盗んだ」。そして2015年にはブリンケンが国務副長官に就任した。国務長官に次ぐポストである。当時の国務長官は、2004年の民主党の大統領候補だったジョン・ケリーだった。やはり、このケリーを

バイデンは、新設の気候問題担当大統領特使に起用する。バイデン政権は、オバマ政権同窓会的な雰囲気となりそうだ。

話が先走った。ブリンケンの経歴に話を戻そう。2017年に共和党のトランプ大統領が就任すると、ブリンケンは、再び政権を離れ『ニューヨーク・タイムズ』紙やCNNテレビで外交問題の解説者として活躍した。さらに2020年の大統領選挙ではバイデン候補の外交顧問として存在感を示した。そして冒頭で見たように、同年末にバイデン新大統領が国務長官に指名した。

## [オバマ・ライト]

バイデンが個人的に親しい間柄の人々で主要ポストを埋めて行く様から、新政権をオバマ政権第三期的と表現する声もある。となると中東政策に関しても、その方向性を察することができる。オバマ政権期のように、イスラエルとは特にネタニヤフ首相とは「しっくり」とした関係とはならない。と言って、同国に強い圧力をかけることはない。そしてイランとの核合意には復帰する。恐らく最大の違いは、サウジアラビアに対する対応だろう。反体制派ジャーナリストのジャマール・カショギの暗殺に関して、バイデンは厳しく批判してきた。またサウジアラビアのイエメン介入についても、同国への兵器の輸出を見直すべきとの立場である。この点は、サウジアラビアへの大量の兵器売却を行ったオバマとは違う立場である。バイデンの中東政策はオバマ的ではあるが、オバマのコピーではないだろう。オバマ・ライトとでも表現できるだろうか。

## [ジョージアの決戦]

2016年のトランプの勝利と2020年の敗北、この二つの明暗を分けた大きな要因の一つはバーニー・サンダース上院議員を支持した進歩派層の動きだった。4年前も今回もサンダースは、民主党の大統領候補指名を求め、最後は敗れた。4年前はサンダース支持層の多くは本選挙では棄権した。中にはトランプに投票した者もいた。それがヒラリー・クリントンの敗北の一因であった。

ところが今回は、サンダース自身も含め進歩派は全力でバイデンを支援した。となると、当然ながら、進歩派の声を政策に反映させるべきだとの要求が出て来る。人事の面では主要閣僚ポストにサンダース議員や、もう一人の進歩派の星エリザベス・ウォーレン上院議員などの指名も想定された。だが、バイデンはそうしなかった。理由の一つとして指摘されているのが、上院の議員構成である。閣僚に就任する際には、上院議員を辞する必要がある。となると議席を共和党に明け渡すことになりかねない。民主党と共和党の数が拮抗する上院では、それは痛い。それに閣僚の就任には上院の承認が必要であり、共和党が多数となれば、余りに進歩的な閣僚の承認は、そもそも望めない。



この点で重要なのは、2021年1月5日に予定されている南部ジョージア州での上院議員選挙である。読者が本稿を目にする頃には結果が出ていよう。ジョージア州だけは、2020年11月3日の大統領選挙と同日に行われた上院選挙で結果が決まらなかった。上院選挙の方式は、各州の独自の決定に任されている。ジョージアの場合には、投票総数の過半数を獲得した候補者がいない場合には、上位得票者二人の決選投票を行うと決めている。11月3日の選挙の結果では、ジョージア州では過半数を制した候補者がいなかった。したがって再投票となったわけだ。上院の定数100議席のうち共和党が50議席、民主党系が48議席を押さえている。もし仮に民主党がジョージアで2議席を奪えれば50議席と50議席で拮抗する。票が割れた場合には副大統領が投票する規則なので、議席数が同数になればホワイトハウスを押さえる民主党が上院を制することになる。そうなればバイデンの閣僚人事は楽になろう。ちなみに各州には2名の上院議員が割り当てられている。

予想は、どうなっているだろうか。伝統的にはジョージアは共和党の地盤である。しかし、大統領選挙ではバイデンが、この州を押さえた。民主党には勝てるチャンスがあるようだ。

また大統領選挙で不正があったとトランプが支持者に訴えたのも、共和党には不利に働くだろう。選挙が不正ならば投票する価値がないと考える共和党員が多く出そうだからだ。

## [ギタリストたち]

いずれにしろ、主要ポストに進歩派が一人も指名されなかったというのは、サンダース支持層には面白くないだろう。そこで、この層が求めているのが、一つ下のレベルのポストへの進歩派の任命である。国務省の場合には、トリタ・パールシーやマット・ダスの名前が挙がっている。

パールシーは、1974年にイランで生まれた。4歳の時にスウェーデンに移住している。移住の背景にあったのは父親の反政府運動であった。父親は王制の時期とイスラム政権期の両方で刑務所暮らしを経験している。パールシーという非イスラム的な名前が示すように、イスラム教徒でもなければシーア派でもない。イランでの少数派のゾロアスター教徒である。イランとイスラエルと米国の関係の研究で、ワシントンのジョンズ・ホプキンス大学で博士号を得ている。その指導教員は、冷戦終結直後に『歴史の終わり』というベストセラーを書いた日系のフランシス・フクヤマである。同大学は、国際関係の研究と教育で知られる名門校である。なお、この大学の医学部が、今や新型コロナウイルスの統計ですっかり有名となった。

パールシーは、イランと米国の対話を長年にわたって訴えて来た。現在は米国のクインシー研究所の副所長を務めている。クインシー研究所は、2019年に民主党支持のジョージ・ソロスと共和党支持のチャールズ・コークが出資して設立された。両者は米国で良く

知られた超富豪である。米国の「終わりなき戦争」への関与を終わらせるのが、設立の目的である。クインシーという名称はジョン・クインシー・アダムズ（1767～1848）から来ている。19世紀初頭にジェームズ・モンロー大統領の下で国務長官を、そして後に第6代目の米大統領を務めた人物である。そのアダムズの言葉「(米国は) 退治すべき怪物を探すために海外に出て行くことはない」が同研究所のモットーである。

マット・ダス（1972～）の方は、サンダース上院議員の外交政策の顧問として知られている。ダスの経歴も紆余曲折がある。両親は福音派の信徒であり、敬虔なキリスト教徒として育てられた。しかしティーンエイジャーの時に、その引力から脱出した。ロックバンドのギタリストの時代を経て、大学に入り中東研究などを専攻した。その後、ブログで米国の介入主義を批判し名を知られるようになった。そしてサンダース議員の顧問として活動を始めた。

もし、パールシーにしろ、ダスにしろ、進歩派が政権内に入るとすると、様々な不協和音が聞こえ始めるだろう。というのはダスなどのサンダース支持層は、イスラエルに対して厳しいからである。イスラエルの入植を止めるために、米国の同国に対する軍事援助をテコに使うべきだと主張してきたからである。その額は年間38億ドルである。これだけ金を出しているのに、口を出さない手はないというのが、進歩派の議論である。バイデンとブリンケンは、この主張を明確に拒絶してきた。本当にバイデン政権は進歩派が推すパールシーやダスを受け入れるだろうか。

組織は人事が万事という。バイデンのサンダース支持層への配慮が、口先だけの約束に終わるのかどうか。あるいは本当に、政策面に進歩的な政策を反映させるつもりなのか。判断するには、人事の動向を、いま少し辛抱強く待つ必要があるのだろうか。

最後に、冒頭で触れたブリンケンの多彩な才能の話に戻りたい。実はダスと同じく、この人物もギタリストとして知られている。そのせいだろうか、個人的には二人の関係は悪くないようである。ダスのツイッターをフォローしていると、ブリンケンの国務長官への指名を評価し歓迎するツイートを書いている。

さて、ダスとブリンケンが、同じ政権内で、ギターを共演するようにハーモニーを奏でることができるのか、注目される。あるいは、バイデン政権の進歩派への配慮は、口約束に終わるだろうか。進歩派の人材を拒否してしまうのだろうか。その見極めには、今少し忍耐を持って待つ必要があるようだ。ちなみにネット上にブリンケンの曲が2曲上がっている。その2曲には、「リップサービス（口先）」と「ペイシャンス（辛抱）」というタイトルが付けられている。

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。